

米原歴史街道

米原市の歴史・文化財を歩く ⑪⑧

近江地域の奴振り②

— 蹴り奴と武家奴 —

坂田神明宮の蹴り奴振り

奴振りの動きで目をひくのは、道行のお練りと道具の受け渡しです。出発や停止のときや、鳥居をくぐるときの作法などで、独特の動きがみられます。基本的にゆつくりとした大きな動きで、動作と動作の間には、いったん静止して力をためます。中腰の時間が長いのも特徴で、これらの動作は、実際に力が必要なこともさることながら、奴の力強さを感じさせる演出効果もあります。

元禄三年（一六九〇）から二年間日本に滞在したドイツ人ケンペルが実際にみた大名行列のなかの、飾りのついた槍・日傘雨傘・箱などの担い手について、「この歩き方というのは、一步踏み出すごとに足をほとんど尻にとどくまで上げ、そして同時に一方の腕をずっと前の方へ突き出すので、まるで空中を泳いでいるように見える。飾り槍や日傘を二、三回あちこちに動かし、挟箱も肩の上でおどつている」と記録しています。坂田神明宮（宇賀野）の奴振りは、



▲ 蹴り奴振り

前傾姿勢で、足を尻に届くくらい蹴り上げる動作から蹴り奴と呼ばれます。関ヶ原の戦いの功績で佐和山城主に封ぜられた井伊直政は、石田三成の遺領をほとんど受け継ぎ、宇賀野も彦根藩領となりました。七代藩

主 井伊直惟のときに、彦根城の鬼門に当たる坂田神明宮を鎮護の神として崇敬され、享保一八年（一七三三）に本社の造営を寄進されました。社殿が竣工したとき、藩主、奥方をはじめ家老、代官以下諸士を挙げて参詣され、そのときの行列の奴が蹴り奴であり、大正六年（一九一七）に当時をしのんで氏子有志により、奴行列が再現されました。坂田神明宮春の大祭（四月二九日）に、同宮から北の宮の宇賀野神社までの渡御の先導として、蹴り奴が振られます。

山津照神社の武家奴振り

奴振りでは、先頭のもものが掛け声をかけることで、他のものが掛け合いをおこない、それにあわせて足運び、道具の振りをおこないます。能登瀬の奴振りでは、「エ（ハ）ーヨーン（イ）ヤアセーイ」「アレワイサーノサー」「コレワイサーノサー」に始まり、「イイ天気ヤナー」「ア、一杯ほしいナー」「アーベツピンさんヤナー」など、おもしろおかしい即興のかけ声により、祭礼を祝い先導をつとめます。

山津照神社（能登瀬）は、古代豪族息長氏とかかわりの深い古社です。神社で毎年春の祭礼に繰り広げられる奴振りは、明治四年（一八七一）まで、神宮寺の善性寺から鎮守社青木神社の祈禱札を宮中に奉納されてきたときの道行列の奴振りに由来します。大正三年（一九一四）

に山津照神社の末社が醒井松尾寺から帰るときに、途絶えていた奴振りを能登瀬の若衆八人が指導を受け復活され、昭和二十六年（一九五一）に長浜市小堀町に安置されていた御神体の一部を迎えたときも、供揃えで露払いをつとめました。昭和四八年保存会が結成され、毎年春の大祭に奉納されています。武家奴とよばれるように、三奴振りで唯一顔に髭などの化粧を施します。

奴振りにのみ注目してきましたが、それぞれ古式ゆかしい行事や、雅楽を奏でる社中があり、宇賀野では子ども神輿が加わって、世代を超えた伝承活動にも取り組まれています。（歴史文化財保護課）



▲ 武家奴振り

写真展
近江三奴と米原市の奴振り

場所 伊吹山文化資料館
会期 2月15日まで

